



病棟薬剤業務の導入により薬物療法は どのように変わったか

「質の高い安心・安全な薬物療法」 の実現に向けて

医療法人社団 明芳会 イムス三芳総合病院 薬剤科 佐藤 秀昭

はじめに

今、医療が急速に多様化する時代を迎え、薬の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することは、医療安全の確保の観点から非常に有益である。従来、薬剤師は調剤過誤防止対策の時代から院内の医療事故防止対策、そしてチーム医療による「質の高い安心・安全な薬物療法」の実現に向け積極的に取り組んできた。

平成 24 年度診療報酬改定において、薬剤師が病棟において病院勤務医等の業務負担軽減および薬物療法の有効性、安全性の向上に資する薬剤関連業務を実施している場合に算定できる病棟薬剤業務実施加算が認められた。

病棟薬剤業務は、どのような業務なのか。また、その導入により薬物療法の「安全」の確保にどう貢献するのか。当院の病棟薬剤業務の取り組みを例に挙げ解説する。

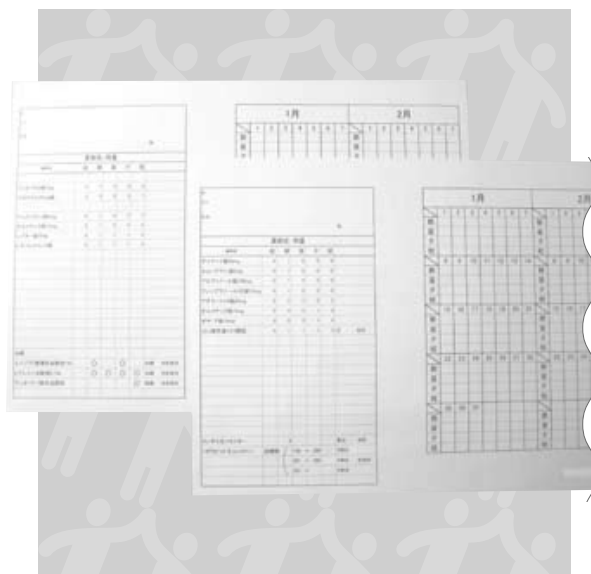
I 病棟薬剤業務

処方医との十分なコミュニケーションを取り「質の高い安心・安全な薬物療法」の提供に携わることは、薬剤師の職責である。病棟薬剤業務は、この職責を果たすための役割を担っている。当院での病棟薬剤業務は 図 に示すように、病棟担当の薬剤師が入院患者との面談により得た既往歴、アレルギー歴、副作用の有無、アドヒアランス、持参薬の種類など収集した情報を記載した「患者情報ファイル」(写真-1)を作成する。このファイルは、担当以外の薬剤師が薬剤管理指導業務を実施するときの情報源として有用である。すなわち、患者情報の収集は、病棟薬剤業務と薬剤管理指導業務に共通する業務で、薬剤師の基本業務である。さらに、持参薬も考慮し、医薬品の安全性情報や相互作用、重複投与、投与禁忌、手術・検査予定などの情報を解析評価し処方提案をする。処方医



■写真-1 患者情報ファイル

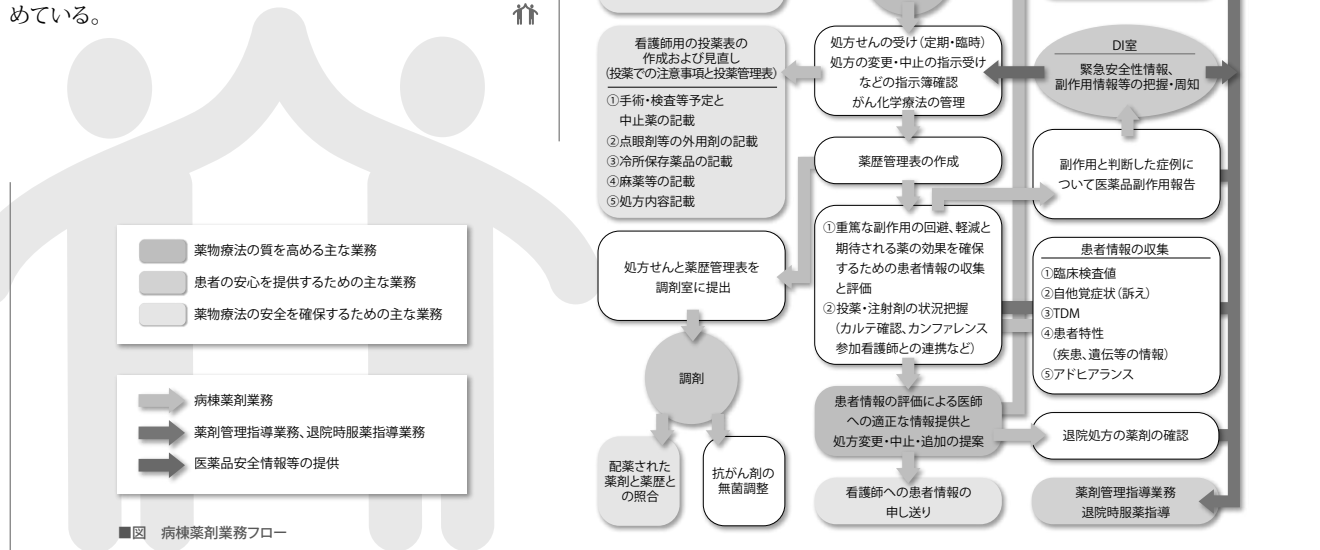
が処方せんを決定後、ハイリスク薬の事前説明、持参薬の運用について病棟(看護師)への情報提供、看護師用の投薬表(写真-2)の作成および見直しを行う。薬歴管理表を作成し、処方せんと薬歴管理表を調剤室に提出する。また、カンファレンスへの参加やカルテ閲覧などから得た患者の自覚症状、臨床検査値、薬歴など多くの患者情報に基づいて処方を解析評価し、薬の効果を



■写真-2 投薬表

最大限引き出し、重篤な副作用を未然に防止するための処方提案を行う。これらの業務過程で得た情報は随時「患者情報ファイル」に記録する。1日の終わりに「病棟薬剤業務日誌」に記入し一連の業務が終了する。

この業務フロー(右図)において、患者情報の解析評価による重篤な副作用の回避などの処方提案は薬物療法の「質」、服薬指導(薬剤管理指導業務)やハイリスク薬の事前説明は患者の「安心」、看護師への申し送りや看護師用の投薬表の提供などの業務は医療の「安全」と、おのおの重要な役割を担っていると受け止めている。



II 薬物療法の安全確保と病棟薬剤業務

通常、インシデントの発生要因は、医療従事者の思い込みなどの単純ミスが大部分を占めている。その他、情報伝達ミスや業務の不慣れなどが占める。

実際、一連の薬物療法の過程では、患者の服薬の確認忘れ、与薬忘れ、投薬間違い、処方変更の指示受け忘れ、手術・検査などによる薬剤中止の指示受けミス、インスリン注射の単位間違いなど多くのインシデントが発生している。これらのインシデントは、配薬された薬剤と薬歴との照合、さらに薬剤に関連する患者情報を把握し、看

護師への申し送りなどによる医療従事者間での患者情報の共有化(情報の連携)により、効率的な防止対策が可能と考える。その手段として、当院で実施している「看護師用の投薬表」の作成、手術や検査による中止薬など情報の提供は、インシデントの発生防止に有用と考える。

また現在、当院の「インシデント・アクシデント・転倒・転落報告書」から医薬品に関連する報告事例について、病棟薬剤業務実施前の平成24年1月から5月までと実施後の平成24年6月から10月までの各5カ月間について分析し、病棟薬剤業務の実施と医薬品関連のインシデントの抑止効果について調査研究による立証を試みている。

おわりに

病棟に専従の薬剤師を配置することが、医療の安全を確保する上で極めて有用であることが報告されている¹⁾。病棟薬剤業務は、看護師との協働による効果的な事故防止対策を担う有用な業務と考える。次号、薬剤による重篤な副作用を回避し期待される薬剤の効果を確保するための処方提案、すなわち薬物療法の質の確保に貢献する処方提案について記載する予定である。

参考資料 1) 松原和夫、他:薬剤師の病棟勤務時間が長いほど薬剤に関連するインシデント発生数は少ない-国立大学病院における調査、薬学雑誌 2011;131(4):635-641.